

Josh SPERLING

Josh Sperling: Summertime

July 2019

色彩とかたちをあやつる ジョシュ・スパーリングの 新しい抽象芸術

Josh Sperling: Summertime

絵画と彫刻の“あいだ”のようなカラフルな立体的作品で知られる美術家ジョシュ・スパーリング。彼の日本初個展が「ペロタン東京」で始まった。オープニングの二日前、われわれ『T JAPAN』はギャラリーで展示の準備を行う彼のもとを訪れた

BY MASANOBU MATSUMOTO, PHOTOGRAPHS BY YASUYUKI TAKAGI JULY 11, 2019

7月1日、美術家ジョシュ・スパーリングは、六本木にあるアートギャラリー「ペロタン東京」で、2日後からはじまる個展の作品設営の真っただなかでいた。ニューヨークから運んできた木箱から、彼はカラフルで奇妙な“スクイグル（くねくねした線やかたち）”のオブジェを取り出し、図面を見ながらひとつひとつ壁に掛けていく。一面がガラス張りになったこの展示スペースは、ビルの中庭からのぞき見ることができ、通行人の多くは立ち止まって、徐々に完成していく色鮮やかな展示風景に、興味深そうに目を向けていった。



ジョシュ・スパーリングにとって日本初個展の会場となるペロタン東京にて。彼は2日間かけて作品を設営した

ひと目で人の関心を惹くほどの視覚的なインパクトがある——この作品は、ジョシュの代名詞“スカルプチャー・ペインティング（絵画と彫刻の要素をミックスさせたもの）”の新作だ。彼は、木板を切り出して立体的に成形し、さらにキャンバスで覆ったシェイプト・キャンバスと呼ばれるモチーフをいくつも使って、グラフィカルなインスタレーション作品に仕上げる。企業のグラフィックデザイナー、また木工ワーカーとしてもキャリアを積んだジョシュの、2つのスキルを融合した表現スタイルだ。

「また、“絵画的経験”も僕の作品の重要な要素のひとつ」とジョシュは説明する。「僕は子どもの頃からずっと画家を目指し、いわゆるオーセンティックな絵画も描いてきた。キャンバスという絵画の伝統的な素材を用いているのは、自分の作品が過去の絵画史と繋がったものであるという意志表明であり、これは絵画の新しい挑戦でもあるんだ」



(左) ニューヨークから運ばれてきた作品。奥の木箱に入っているのは、幾何学モチーフを組み合わせた“コンボジット”タイプの新作

(右) ジョシュ・スパーリングは、1983年、ニューヨーク州オネオンタ生まれ。2016年より、キャンバスを变形させた“シェイプト・キャンバス”の作品を発表。ルイ・ヴィトン財団にもその作品はコレクションされている

抽象的で遊び心にあふれた彼の作品は、特にフランク・ステラの作品をはじめ60年代から70年代に隆盛したミニマルアート、80年代に流行したデザイン集団「メンフィス」のオブジェや家具からインスピレーションを得ているという。さらに、街中に見られる抽象的なサイネージやポップ的なもの、SF映画に登場するようなグーギー建築（戦後、LAで生まれた幾何学的な建築スタイル）にも。

「僕は1984年生まれ。わかりやすく言えば、90年代にMTV（ポップミュージックビデオを放送する音楽専門チャンネル）を観て育った世代なんだ。そのときに観たビデオ・コンテンツには、たとえばメンフィスに影響を受けたものも多くあって、それらのイメージは僕の頭に焼きついている」とジョシュは付け加える。

その意味で、彼の作品は、20世紀初頭にはじめて抽象絵画を自覚的に描いたワシリー・カンディンスキーのような作品とは趣が異なると言えるだろう。カンディンスキーは、絵画の中で、現実にはない幾何学的な配置の美しさを探求した。一方、ジョシュのアートは、過去の美術史的なエレメントに加え、そうした抽象的なモノがすでに日常に存在する現代の、さまざまな要素を練りあげながら生み出されている。彼の作品が、同時代的であり、また新しい抽象芸術のムーブメントを暗示させるものとして注目を集めているのは、おそらくそのためだ。



《Summertime A, B, C, D, E》

2019年 キャンバスにアクリル絵の具 サイズ可変

PHOTOGRAPH BY GUILLAUME ZICCARELLI.COURTESY OF THE ARTIST AND PERROTIN

この個展で、ジョシュは、ギャラリーの2つの展示室にそれぞれ異なるタイプの作品を展示した。メインスペースには、カラフルな“スクイグル”の新作インスタレーションが、もうひとつの小部屋には、“コンポジット（いくつかの要素を組み合わせたもの）”の作品が色鮮やかに並ぶ。この“コンポジット”も彼のもうひとつのシグネチャーだ。丸や三角など幾何学的なかたちのキャンバスや板を重ね合わせたオブジェで、そのなかにはあのかたがたのモチーフも潜む。“スクイグル”作品のスピノフでもある。

なかでも、今回チャレンジしたことは何かと問うと、ジョシュは真っ先に「“スクイグル”のインスタレーション方法だね」と答えた。過去、このシリーズは、モチーフを壁一面のみに配置したものだったが、本展では、部屋全体の壁を覆い、没入感のある展示を試みたという。そして、この作品はスケールが大きくなればなるほど、作り上げるのが難しくなる、彼のこだわりとも言える理由もある。「モチーフにさまざまな色を施しているけれど、じつはひとつとして同じ色を使っていないんだ」



(左) ジョシュは、「シンプル」「ビューティ」「ファン」の3つの視点から自身の作品を鑑賞してほしいと話す。「この3つの言葉は、自分の人生のモットーでもあるんだ」

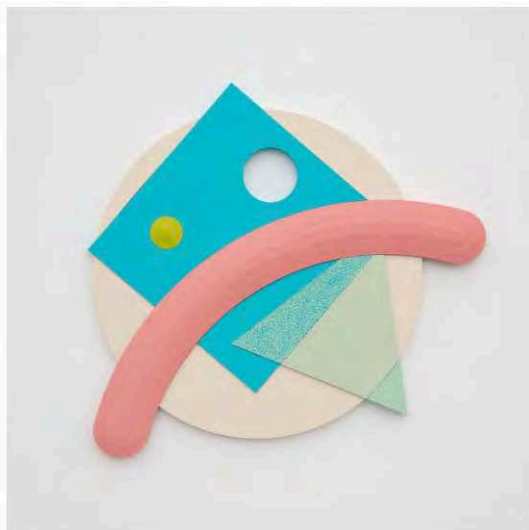
(右) 会場に置かれた、作品の配置を記す図面

(左) 立体的なフォルムも彼の作品の特徴だ。それにより単色のモチーフに陰影が生まれ、グラデーション状に見える

(右) それぞれのピースの背面にサインを記す

後日、設営を終えたばかりのギャラリーを訪れた。そこで、ジョシュは、個展名の『Summertime』を、ロックバンド、ザ・フレーミング・リップスの楽曲《It's summertime》から取ったことを、われわれに明かしてくれた。タイトルをつけるのがあまり得意ではないという彼曰く、この名前に決めたのは、「ギャラリーにタイトルを提出しなければいけないギリギリのタイミングのとき、アトリエにこの曲が流れていたから」。

「だから、特別な意味はないんだ」と本人は語るが、“夏”を冠にしたことで、このエキシビションは、われわれに新しい抽象表現のひとつのかたちを提示すると同時に、鑑賞者が素直に楽しみ、寄り添えるものになった。「日本の夏は、とても湿気が多くて暑いと聞いているからね」とジョシュ。「そんな夏に、こういったカラフルなインスタレーションは、観る者の目にきっと心地よく映ると思うんだ」



(Debbie Downer)

2019年 キャンバス、パネルにアクリル絵の具 85x92cm

PHOTOGRAPH BY GUILLAUME ZICCARELLI. COURTESY OF THE ARTIST AND PERROTIN



色彩もジョシュの作品の重要な要素。彼のアトリエには、絵の具の配合比を記したノートがあり（自身はそれを“レシピ”と呼ぶ）、制作を重ねるたびに“ジョシュの色”は増えていく。その数はすでに700色を超えていると話す

（左）作品が収納された木箱を開けるジョシュ
（右）幾何学モチーフを組み合わせた“コンボジット”タイプの作品には、まだら模様の詳細も見られる。これは、アメリカのポップ・アートの代表的作家ロイ・リキテンスタインの「コンボジション・ノート」から着想を得たもの

<ジョシュ・スパーリングへ10の質問>

―― 作品制作をする日のだいたいのスケジュールを教えてください。

制作する日は、月曜日から金曜日まで。朝、まずコーヒーを飲んで、子どもを保育園に送り届けてから、9時から夕方5時まで作業にあてている。忙しいときは、夜中にアトリエに戻って12時くらいまで仕事をするときも。夜は、アシスタントが帰ったあと、ひとりで作品に向かい合う時間でもあるんだ。

―― あなたのお父さん、おじいさんもアーティストだったと聞きました。影響を受けた言葉は？

特に影響を受けた言葉はなかったね。ただ、父親は、僕が小さいころから作品をつくることをすすめてくれて、絵の具や紙、ノリなどを用意して遊ばせてくれたんだ。当時の作品づくりも、今の自分に影響を与えた要素だと思う。

―― 記憶に残っているいちばん古い物語は？

モーリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』。主人公と怪獣たちが夜中、森の中でパーティのように踊り、騒ぐシーンがあって、それをよく覚えている。

―― いちばん最初につくった作品は？

子どものときから、いつも父親が僕に作品をつくらせて遊んでくれたから、いちばん初めに作ったものは覚えていないね。だけど絵からコラージュまで本当にたくさんの作品をつくったよ（笑）

―― 制作の最中、気晴らしに行くスポットがあれば教えてください。

いま、ニューヨーク州のイサカという小さな田舎町に住んでいて、近くに湖があるんだ。そこで泳ぐのが最高の気分転換。



《Peeping Tom》

2019年、キャンバス、パネルにアクリル絵の具 84x106cm

PHOTOGRAPH BY GUILLAUME ZICCARELLI. COURTESY OF THE ARTIST AND PERROTIN

—— 自宅にある、自慢のコレクションを教えてください

じつは、あまり蒐集癖がなくて、モノを多く持たないのが僕の理想なんだ。あえて言えば、チワワかな。2匹、飼っている。

—— 今、読んでいる本は？

長らく紙の本は読んでいなくて、オーディオブックがほとんど。お気に入りは、劇作家ベティ・スミスの自伝的小説『ブルックリン横丁』、ジョン・スタインベックの『エデンの東』。

—— アート以外で、関心のあることは？

音楽、食べ物、デザイン、建築——たくさんものごとに興味があるけど、それは創作のインスピレーションにもなっている。

—— 生活において、自分に課しているルールがあれば教えてください。

毎晩、家族と夕食をとること。さきほど5時には仕事を切り上げると言ったけれど、それは家族と過ごす時間をキープするためなんだ。

—— あなたをいちばんハッピーさせることは？

なにより作品が完成したとき。あとは、太陽の下で、ひなたぼっこすることかな（笑）

『Josh Sperling — Summertime』

会期：7月3日（水）～8月10日（土）

会場：ペロタン東京

住所：東京都港区六本木6-6-9 ピラミデビル1F

開廊時間：11:00～19:00

休廊日：日・月曜、祝日

電話：03(6721)0687

公式サイト